

フランソワ・ブーシェによるボーヴェ製作所のタピスリー連作 神々の愛 (アポロンとクリュティエ)をめぐって

東京芸術大学大学院博士後期課程
小林亜起子

神々の愛 (全 9 点)はフランソワ・ブーシェ(1703-1770)の下絵にもとづき、1747 年からボーヴェ製作所において制作されたタピスリー連作である。同作品の主題はオウィディウスの『変身物語』で語られる古典的神話に取材している。この連作については E.A.スタンデン(1986)の基礎研究以来、N.フォルティ・グラツィーニ(1994)、C.プレマー＝ダヴィッド(1997)らによって断片的に論及されてきた。しかしながら、一連の先行研究は、現存するタピスリーの来歴や作品の注文主などの情報を明示することに重点を置くものであり、ブーシェのデザイン自体に関する考察は十分にはなされていない。本発表では、連作 神々の愛 のうち、これまで断片的な考察がなされてきたにすぎない(アポロンとクリュティエ)(下絵は現存せず)を対象とし、その視覚上・文学上の着想源を新たに提示することを試みる。

『変身物語』によれば、クリュティエは恋人のアポロンがレウコトエに心移りしたことに嫉妬して、彼女を死に至らしめたためにアポロンに遠ざけられ、次第に衰弱して最後には太陽を見つめるとヒマワリに変身したという。17 世紀よりフランスでは「神々の愛」をテーマとしたタピスリーが数多く制作された。ブーシェの連作の主題の多くは、すでにタピスリーの先行作例があるもの、あるいは絵画でしばしば取り上げられたテーマである。しかし、(アポロンとクリュティエ)はそのどちらにもあてはまらない点で、きわめて興味深い作例といえる。しかしながら、本作品については C.J.アデルソン(1994)によってタピスリーの制作の経緯に関する情報が示されたほか、視覚上の着想源として、馬の描写についてはルーベンスの素描、アポロンのポーズはラ・フォスに基づく版画が、それぞれ F.ジュリー(1988)と J.ヘドレー(2004)によって指摘されたにとどまっている。

本発表では、まずクリュティエの図像表現を 17 世紀以降の挿絵、絵画、彫刻を中心に検討し、ブーシェの作品と比較する。クリュティエの図像は、主に、花に変身する途中の様子、あるいは悲嘆にくれる姿で表わされ、ヒマワリは持物として描かれている。一方、ブーシェによるクリュティエは、アポロンと手を結び愛に満ちた様子で雲に座し、ヒマワリは水辺に生き生きと描出されており、一般的な図像表現と際立った相違が看取される。次に、ブーシェの場面描写の着想源として、新たに、17 世紀に刊行されたエンブレム集を指摘し、そこに見られるヒマワリと太陽に関するデザインと、それをめぐる解釈に関連付けられることを論じる。具体的な人物像のポーズや画面構想については、当時版画としても入手可能であった、ルーベンスの連作 マリー・ド・メディシスの生涯 (パリ、ルーヴル美術館)、およびアンニーバレ・カラッチのファルネーゼ宮の天井装飾画に着想を得ていることを示す。さらに、こうした参照関係を通じて、本作品の主題選択および場面描写が、世紀半ば、ルイ 14 世統治下の古典主義美術の復興を目指した、王立絵画彫刻アカデミーの動向と結びつくことを指摘したい。ブーシェはその後アカデミーの院長、国王付き首席画家という地位を獲得するに至る。この輝かしい画業を考える上でも、本タピスリーは重要な指標をなす作品となるであろう。